琉球大学学術リポジトリ

パネルディスカッション記録 ：琉球大学観光科学科に求められる観光人材とは

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学院観光科学研究科
	公開日: 2016-02-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: -
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002008220

観光科学　第 7 号　（平成 27 年 12 月）　pp.73-85
Journal of Tourism Sciences. Vol.7 (December.2015)

パネルディスカッション記録
：琉球大学観光科学科に求められる観光人材とは

パネリスト

①沖縄ツーリスト株式会社会長　東　良和氏（元観光科学科アドバイザリーボード）
②琉球大学観光産業科学部観光科学科客員教授　上地　恵龍氏
③琉球大学観光産業科学部観光科学科准教授　大島　順子氏
④観光科学科同窓会『観友会』会長　安田　賢吾氏
⑤観光科学科 3 年次　高江洲　景子氏

コーディネーター

琉球大学観光産業科学部観光科学科教授・学長補佐　下地　芳郎

司会

琉球大学観光産業科学部観光科学科教授　平野　典男

下地：皆さん改めてこんにちは。本日はシンポジウムにお集まりいただきありがとうございます。

今日は最初に学長のあいさつ、荒川学科長の 10 年の歩みというのもありました。上原会長からは観光に限らず、もう少し広い視野でのお話もありました。上原会長から最後にお話がありましたのは、沖縄が国家戦略特区ということで、これから大きく伸びていこうと。その中でまだまだ具体的な提案が上がっていない。いくら提案をしようにも人材がきちんとそろっていなければ進んでいかないという大きな課題があると私自身も考えております。

そうした中でこれまで大学が進めてきた役割、先ほど言いました研究と教育と社会連携、この 3 つが非常に重要なわけですが、今回は特に一番上にあります琉球大学の地（知）の拠点整備事業、琉大コミュニティキャンパス、このほしぞら公民館も、今年 5 月に琉球大学のサテライトキャンパスとして位置づけをさせていただきました。宮古島と石垣島にもそれぞれ宮古島の公民館、石垣市では市立図書館の協力を得て、琉大のサテライトキャンパスという位置づけをさせていただいております。これまでもこういう形で何度も両地域に配信をしておりますし、今後もこのスタイルを続けていきたいと思っております。そうした琉球大学が、これから観光人材の育成をやっていく上で、どういうことに取り組めばいいのか。特に研究、教育、社会連携の 3 つの中で、社会連携を強く意識した中でどういう取り組みができるのだろうかということを、この 10 周年の記念の中で進めていきたいと思っております。

それでは、改めてそれぞれのパネリストから自己紹介をしていただきながら、これから議論を進めていきたいと思います。それでは東会長よろしくお願いいたします。

東：皆さんこんにちは。沖縄ツーリストの東でございます。私は、ここに書かれているように、観光科学科を立ち上げるときのアドバイザリーボードメンバーをしていました。アドバイザリーボードというのは、外部の人たちが集まって、いろいろと、この観光科学科が将来どういった部分で沖縄の観光を支援していくのか、貢献していくのかということを考える組織です。

当時のことをお話しすると、設立にご貢献された大城常夫先生が、非常に熱心に将来ビジョンというのを掲げていたことを思い出します。それと同時にアドバイザリーボードの座長は元副知事でもあります比嘉幹郎さんが務められて、みんな琉球大学の同窓会会館でしたっけ、あそこで何度も手弁当でミーティングをしていたことを思い出します。

それから、今日は観友会の会長も一緒にいますけれども、観友会も私がアドバイザリー会員のときの発起人の一人でもあります。大学のカリキュラム自体も非常に重要ですが、卒業生がいかに観光産業の中、または観光産業にとらわれず、または沖縄県内外にとらわれずにネットワークを築いていくかというのが重要な部分だと思います。

私は、アメリカのコーネル大学のホテルスクール大学院を卒業しましたけれども、大学のカリキュラムももちろん重要ですが、卒業後に強力なネットワークを持っているということが、学部とか大学院が社会に影響力を持つ一つの大きな要因だと思います。コーネルは、コーネルホテルソサエティというのがあって、これはいい意味でも悪い意味でもコーネルマフィアとも呼ばれて、実は沖縄の観光、ホテルのファンドの部分などでもいろいろ情報が取り交わされています。そういった部分も少しあとでまた紹介させていただければと思います。

本当に10周年おめでとうございます。そして、私は予想以上の成果が出ているのではないかと思います。激変する国際観光の中で、海外からのお客さんがどんどん増えている、これは沖縄だけのことじゃないんです。アジアの都市はみんなそうです。逆に言うと、最近日本は、去年1000万人の外国人観光客が来ましたので観光ブームということになっておりますが、東京や大阪などの日本を見ても、ほとんど学ぶものはありません。観光後進国です。ですから、香港やシンガポールそういったところに目を向けていく。沖縄の伸び率も決して高いものではありません。数だけが全てではないですが、グローバルに成長しているところに目を向けることによって、我々の立ち位置、これからの戦略が出てくるのではないかと思います。

とりあえず自己紹介とさせていただきます。今日はよろしくお願いします。

下地：ありがとうございました。既にだいぶ中に入っている感じもしますけれど、まずはイントロということで自己紹介をお願いいたします。

上地：イントロということで簡単に自己紹介をさせていただきます。2008年に観光科学科が設立された当初、民間会社から大学の教員として転職してまいりました。以前は30数年間、航空会社のホテル部門の経営といいますか、そのうち24年間は海外のプロジェクトを担当させていただいて、琉球大学は自分の母校でありまして、少しでも自分の経験したこと、体験したこと、知識を後輩の皆さんに少しでも多く伝えていきたいということで、2年前まで教員をさせていただいていました。今日は現在、考えていることを簡単に後ほど紹介させていただきたいと思います。以上です。

大島：私は現役の教員を代表しまして、パネリストで登壇させていただいております観光科学科教員の大島順子と申します。本日は10周年のためにお集まりいただきましてありがとうございます。私は今、環境教育――「え、観光ですか、環境ですか」といつも確認されるんですけれども、私は沖縄の環境資源をいかに守りながら活かすかということを教育学的な視点から追究、教育・研究に当たっています。今日は特に観光科学科設立時から始まって、これまで主に学生に向けての教育面で、どのようなことに力を入れてきたかを3点ぐらい、簡単に絞ってお伝えできればと思います。よろしくお願いいたします。

安田：こんにちは。2005年、観光科学科ができる年に1期生として入学、2009年に卒業しました。その後、琉球銀行に勤務しております。また、同窓会の会長として同窓生のネットワークを築くべく尽力しています、安田賢吾と申します。本日は、このパネリストの一員として、卒業生の代表――代表というと恐縮ですので、1つの意見ということでお役に立てればと思います。よろしくお願いいたします。

高江洲：皆様こんにちは。観光科学科3年次の高江洲景子と申します。このような豪華なパネリストの皆様とともに壇上に上がらせていただいて大変恐縮なんですけれども、本日は現役の学生の目線で、私の意見を少し言えたらと思っています。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

下地：皆さん、ありがとうございます。それでは、時間も限られておりますので、少し早めていきたいと思いますけれども、先ほど来、観光科学科ができて10年というお話をしておりました。大島順子先生は設立当初からそのメンバーでもありますので、この10年間をどう見られているのか、設立のときの趣旨がどのように今も受け継がれているのか、この辺りも含めて少しご紹介をお願いしたいと思います。

大島：ありがとうございます。先輩方を差し置いて、僭越ながら先にお話しさせていただきます。短い時間でもありますので、先ほどお話ししましたが、大きく3つのポイントでお話しできればと思います。

県外、国外に飛び出してチャレンジする学生を応援する、この姿勢を私をはじめとする先生方は貫いてきました。具体的にどういうことかといいますと、特に最近は非常に内向きな学生が多くて、沖縄県内の学生は外に出るのを非常にぐずるといいますか。これはもちろん経済的な事情も関係します。しかしながら、就職先もできるだけ県内で探そう、インターンシップも県内でという形で、割と外向きに国外を見るというチャンスがなかなかない中、思い切って1年休学して、そして自分のやりたいこと、県外、そして国外へ行ってきなさいということを一生懸命支援してきました。

実は、当初40名定員が2年後には60名定員になりましたが、学科の学生の4分の1、ないしは3分の1が、半期ないし 1 年の休学をして違う世界に飛び出します。これはおそらく学科の先生方の支援、帰ってきてからもいろいろなサポートのたまものです。一番多いのが語学の短期留学でした。これは3カ月、半年を含めて 1 年間。この語学の短期留学というのは、プライベート、個人でする場合もありますが、琉球大学の場合は正規の交流拠点大学がございますので、そちらを活用して、アメリカやヨーロッパ、そして中国にも、現在は学生が留学しています。それから、語学留学だけではなくて、例えば、「僕、世界1周行ってきます」とか、「放浪の自分探しの旅に行ってもいいでしょうか」という形で、学生が半期ないしは1年間外に飛び出すことを、私たち教員は陰ながら支えてまいりました。

ですから、他学部、他学校の先生から、あるいは学生から、「観光の学生は外に行くのが当たり前なんですね」ということを聞いたことがあります。そういう意味で、県外、国外に飛び出し、チャレンジする学生を積極的に応援する姿勢を貫いてまいりました。これに関しては、現在まで10年間続いていると私は自負しています。地域及び広く社会に貢献できる能力、そして国際的な価値観、多様な価値観を身につけるためにも、国外、県外に元気よく飛び出していくということを、今後も大事にしていきたいと思っています。

今日のお話の中でも、ハワイ大学との連携ということを何回も、パネリストをはじめ、学科長も口にしていましたが、実は、皆さんもご存じのように、沖縄にとってハワイは、さまざまな形での歴史的つながりのある、非常に交流の深い州です。そういう中で、実はハワイ大学との遠隔事業を、当初2005年にスタートするときに担当したのが私でした。このカリキュラムを設定するとき、非常にいろいろな意味での壁がありました。現在、10年続いて、この後お話しくださる上地先生が担当されています。当初は、まだインターネットがそれほど自由に使える時代ではなくて、100万円以上かけて大学に機械を入れていただいたりとか、そのシステムが毎年アップデートされるので、そういったものへの対応、そして何しろ、ただの遠隔授業だけではなくて、実はハワイ大学の担当の先生に、ハワイ大学で培った観光教育のカリキュラムを教えていただくという、学科設立当初の教員にとって非常に勉強になる内容でした。今現在は 15 週間、プラス、フェイス・ツー・フェイスの対面授業もこの遠隔授業の中で扱っていますが、これを通して学生が一番最初に言ったのが、この言葉でした。英語を英語以外の授業で学ぶ。つまり、英語の授業ではないわけで、英語を使って観光を学ぶことを可能にしたという意味では、非常に画期的な事業のスタートだったと思います。

この授業を受けた学生は、1期生の中でもそうですけれども、他学部他学科にももちろん公開しておりま

した。現在、初めてその遠隔授業を受講した学生が今日、登壇のパネリストで来ていただいています東会長のいらっしゃるOTS（沖縄ツーリスト）にも就職している学生がおりますし、ほかにもJTBさんに勤めている方がこの遠隔授業を経験しています。そういう意味で、非常にプラスになるいい授業が現在も続いているという意味で、大事なものだと思っています。

最後に1つ、当学科が非常に大事していることとして、学生ひとりひとりの個性を大事に、やる気を引き出していく教育を掲げています。これは一方的な講義式の授業ではなくて、参加型の授業、つまり授業にグループワークを取り入れたり、教室を飛び出しての授業、現場を見る。実践型の学生を養成するためには、私は特に北部、山原の方に毎月必ず学生を連れ出し、そしてインターンシップにはできるだけ離島に行くようにという形で、沖縄県の49の有人島に――琉球大学に集まってくる学生さんは沖縄等の出身者が多いので、できるだけ沖縄の離島の現状を知るようにということで、インターンシップはじめ、外で現場を見る機会に非常に力を入れてます。

また、観光科学科ではJICAの研修など、いろいろ県内外のさまざまな国際機関との連携もありますので、そういった研修生を授業に受け入れて、一緒に英語でお話しするとか、そういった多様な価値観とふれ合うことができる教育の場を心がけてまいりました。そういう意味で、学生ひとりひとりのニーズ、個性を大事にやる気を引き出す教育に力を入れてまいりました。

以上、3つの視点からお話しさせていただきました。

下地：ありがとうございました。今お聞きになって分かるとおり、すごい情熱を持って大島先生は学生に当たっておりますし、実は研究室が私の隣なんですけども、学生と議論しているときには私の部屋まで筒抜けです。元気いっぱいで、学生もそれに応じて元気いっぱい、フィールド実践型ということもありますし、常に現場でも考える。当然授業も大事にされておりますけれども、しっかり国際化を意識して、現場を踏まえて熱く取り組んでおられます。今日もそのお気持ちが伝わってきました。ありがとうございました。

それでは、上地先生にお願いしたいんですが、先ほど自己紹介にもありましたとおり、企業の方から大学に来られてこれまで取り組んできたことを中心にお話をしていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

上地：まず採用されたとき担当の先生から、観光科学科の目標について教えていただいたこと、あるいは指示を受けたことは、この学科というのは世界及び沖縄の観光振興に貢献ができる国際的に通用する実践型の人材育成を目指しているんだよということでした。在任中はその目標に沿って、実践的な観光教育をひたすらに進めてまいりました。学科が開設した科目の一部で、実際自分が担当した科目を簡単に補足という形でご紹介させていただきます。

1つは、先ほど大島先生から説明がありました遠隔授業を私は4年間ずっと担当しておりまして、皆さんご存じのように日本の学生というのは、特に観光科学科の学生は英語重視という条件で入学をしてきました。多くの学生は英語の能力はありますが、どうしても実際使うことになるとなかなか出てこない。ハワイの授業というのは、ウエブカメラを使って教員と生徒の両方を画面に映して、先生もはっきり見えて、学生も先生の顔と先生の資料を直に見ることができます。海外の大学の授業というのは、90分の中で先生は1時間しか話をしません。残りの30分は、質問で、any question？ずっとこれなんですね。最初一番大変だったのは、なかなか出てこない。なかなか手を挙げてくれない。仕方なくて指名ということで、何とかたどたどしい英語で、私の方で助けながら最初のうちはスタートしました。

だんだんと皆さんが自発的に手を挙げて質問したり、先生も忍耐強く説明していただいたりして、大学での遠隔授業の意味、あるいは効果というものはこういうものかと、数年間やってきて、やっと最近、

すごく感じた次第です。これも同じくハワイの話なんですけれど、先ほど荒川先生から説明がありましたように、民間企業の基金を活用して過去 3 年間、2012 年からスタートして、海外研修プログラムをつくりました。もちろん、ずっとハワイではありませんが、過去 3 年間は、私と、下地先生にも昨年行っていただいて担当しました。そこから選抜して比較的英語の堪能な学生を連れてまいりました。朝から晩まで英語で授業を受けるのはかなりしんどいんですが、1 週間も経つとだんだん学生が慣れてきて、普通に先生とやりとりをします。チャンスを与えればできるようになります。

うれしかったことは、最終日、卒業式に先方の学部長から、今までハワイには数多く日本の学生が来たが、理解力があり、質問できて、力があるのは琉球大学観光科学科と言われました。決してお世辞じゃないと思います。私もそう思いました。そういう意味では、ハワイ大学との遠隔授業にしろ、研修プログラムにしろ、学生に外に出てみよう、外に対して関心を持とうというきっかけに非常に役に立ったなと。実際にプログラムに参加した学生は、必ず毎年ハワイ大学、あるいはほかの大学に留学しています。大学にとって、学生に機会を与えるということはとても重要な役割だなと考えています。

最後にもう 1 つ、あまり話が出ませんでしたが、インターンシップです。インターンシップというのは、皆さんもわかるように、地域の企業、県外の企業、海外の企業とのやりとりをしながら、何とかして履修先を確保して学生にチョイスしてもらう。仕事は授業の数倍の能力を要します。今では、約 13 分野、観光関連をはじめとする 41 カ所の事業所からうちの学生の実習を受け入れてもらっております。

その授業を通してキャリア教育を通じて、働くということはどういうことかを、まず認識してもらう。もう 1 つ、今よく言われるミスマッチですか、将来職業を選択する際に少しでもミスマッチがないように指導してまいりました。荒川先生からもお話がありましたように、それによって創立時以来 90%台後半の就職率を保ってきたというふうに自負しております。

簡単ですが、私からは以上です。

下地：ありがとうございました。

今お二人の先生から観光科学科ができて 10 年間についてお話しいただきました。他の先生方もいらっしゃいますが、今日は代表ということでお 2 人に出ていただいております。実際に、先ほど荒川先生からもお話がありましたけど、琉球大学観光学科には全国、県内でも離島を含めさまざまな地域から学生が来ております。今日は、宮古、石垣にもサテライトキャンパスということで参加をいただいております。当然その地域からも学生が来ております。今日はその学生を代表しまして、観光科学科の第 1 期生としてどのように感じてこられたか、就職をしてどのように観光科学科での勉強なり、実践型の教育が活かされているのか、そのあたりの紹介をしていただきたいと思います。

最初に安田さんからお願いいたします。

安田：私は、1 期生として入学、卒業しまして、そのまま新卒という形で社会に出ました。そこで、4 年間大学で学んだことが、社会に出てどうだったかを個別具体的に振り返ってみたいと思います。

まず、これは先生方の意図するところではなかったと思いますが、ワードとエクセルを使えるかどうかというのは、観光科学科を卒業した学生であれば、当然のようにレポート作成や、エクセルを使ったグラフ作成、これをもとにした自身の研究を手がけてきたと思います。意外と社会に出てみると押し並べて同僚、同期、先輩、近しいメンバーを見ても、パソコンを使い切れない人が多かったりします。これが以外とギャップがあったのかなと、当然だと思っていたことがスキルとして身についていたのかなと。もちろん、エクセルとワードのスキルということにある程度のレベル感はあったんですが、何しろ苦手感がないので、自身で、例えばこういう技はないのかとか、どうやったら文体がきれいに見えるのかとか、そういう実務的な部分で役に立ったと思います。また、文章を作成するとき言葉を選んだり、自分

の伝えたい表現をどんな単語を使って提出するかといったことも 1 つの訓練だったと思います。企画書やプレゼンテーションの機会が当然のように出てくる中で、そういうスキルが卒業時点で身についていたのか、それとも社会に出て本業をしながらそういうスキルの取り組みもしていくのかでは、大きな差が出てくると感じました。これは先生方が意図していなかったことかもしれませんが、意外とそういったスキルが役に立ったと感じました。

また、ゼミという単位で、僕らのころは 3 年生、4 年生のときに各興味のある研究テーマを持った先生のゼミの扉をたたいて 2 年間ご指導いただきました。その中でもゼミということで、それまでは――これは学科共通の点だと思いますが、高校生までは一種義務教育の延長に近い部分があったのかなと。琉球大学に進学した後は、自身で研究テーマ、問題を見つけて、それに対する解決のソリューションは何なのかということを思案するという訓練の場だったと感じています。社会に出てからそういった、スキルとまでは言いませんが、下地が自分にとって役に立っていると感じているところです。

あとは、沖縄県の経済は観光を抜きには語れないということは、紙面や報道を見ても触れるキーワードだと思いますが、観光という冠がつく学科にいたことによって身の回りに起きることを、観光という切り口、視点で見たときにどうなのかなと考えるきっかけになったと思います。4 年間、テーマを持って過ごすことができたのは、視野を広げるチャンスだったと思います。

学科の人員構成を見ても、女性が圧倒的に多い学科、県内外、海外からも来るような学科で、価値感、文化感の違い。同じ県内でもあっても離島出身、南部中部北部といろいろなところから来ていて、文化や風習の違いはあっても、狭い範囲での付き合いを越えて人脈をつくることができたのだと思います。具体的には人脈が直接に役に立ったという事例はないですが、コミュニケーションがとれるような環境、同窓生ということで、気兼ねない情報交換、生の声を耳にすることができます。自分も同僚に情報を提供できるようなネットワークを続けていって、今後、学生卒業生の役に立つようにしていきたいと思っています。とりとめのない話になっていますが、所感ということで意見を述べさせていただきました。以上です。

下地：ありがとうございました。今お話が出ましたけども、今の学生は、私は他の学部の学生もそうだと思っていますが、プレゼンテーションなどに長けています。実は昨日も学生のプレゼンの機会に立ち合ったんですが、私が想像する以上にいろいろな工夫を凝らしていました。表現力を磨くという意味においては、授業の中でそれぞれの先生が個別に発表させたり、グループでディスカッションさせたり、先ほど上地先生の話にあったハワイ研修なんかも、終了後に一般の方も入れた中できちんとプレゼンをする、時間を守ってプレゼンする、そういうことが今当たり前に行われていますので、このあたりは今後もきちんと続けて行く必要があると思いました。

それでは、現役の学生の立場で、昨年のハワイ研修にも参加をしていますし、今年のミス沖縄として国内外で沖縄の PR にすごく活躍されております。実際に学業生活とミスの活動の両立は難しい部分もあると思いますが、ご自分の勉強なり活動の中で感じたことを紹介していただきたいと思います。よろしくお願いします。

高江洲：私は観光科学科に入学して 3 年目になります。観光というものは本当にさまざまな側面からアプローチができる、非常に特殊でとても面白い学問だなと日々感じております。先生方の専攻を見ても医学だったり、農学、法学、多岐にわたっていることも大変興味深いことですし、各専門分野を通して見る観光を学べるということは大変有意義です。

沖縄のリーディング産業とも呼ばれる観光を私自身が実際に学んで行く中で、私には地元沖縄に対して貢献したい気持ちが生まれました。そして、昨年の冬に沖縄観光親善使節ミス沖縄に応募し、幸運にも上

原会長率いる沖縄観光コンベンションビューローにて活動させていただいております。学校で学んだ点というのは、このミス沖縄という業務の中でも多く活かすことができました。1 つ事例をご紹介させていただきます。東京都内で 3 月 5 日のサンゴの日に沖縄県の慶良間諸島が国立公園に指定されまして、その記念のイベントが東京都内で行われました。私もそちらに参加させていただいた際、この観光科学科で勉強していなければできなかった PR が、ステージ上でできた自信があります。それは何かというと、今一番ホットである慶良間諸島を私が PR し過ぎることによって、もし、観光客の皆さんが押し寄せた場合、地元住民はどう思うかなと意識的に考えることができました。そのころの私の頭の中は、学科生は分かると思いますが、越智先生や大島先生の顔が駆け巡っていました。その授業があったからこそ、そう考えることができましたし、そもそも慶良間諸島は、透明度の高い美しい海、色とりどりのサンゴ礁、冬にはザトウクジラの繁殖地にもなる、豊かな生態系が評価されてのことで、それを守ることを前提に楽しんでほしいという気持ちを PR の最後に付け加えることができました。これも学んでいたからこそできた考え方であったと思いますし、本当に感謝しています。このように学校で学んだ理論をミス沖縄という実践の場で活かせたことは、大変うれしかったですし、改めて考え直す勉強にもなりました。

先ほど上地先生も大島先生もおっしゃっていましたが、1 年生の後期にツーリズム・ディベロップメント・オブ・ハワイというハワイ大学との遠隔授業を受講させていただきました。それでハワイの観光の基礎知識をつけた上で、さらに興味が湧いたので、2 年次の夏、ハワイ大学にてハワイの研修プログラムにも参加させていただきました。外から比較しながら沖縄の強み、また弱みを考えるという貴重な経験をさせていただきました。現地で生活することで改めて見えてくる沖縄の良さ、そういったものに気付かされ、2 週間の滞在だったんですけれども、その間に私が思ったことは、世界的観光地であるハワイに負けないポテンシャルを沖縄は持っているのではないかということでした。地元の豊かな資源を再認識することで生まれた愛着や誇りは、私自身がこれからも大切にしていきたいと思いますし、こういった数々の気付きをくれるこの研修は、これからもぜひ継続していただきたいと思います。以上です。

下地：ありがとうございました。今、最後にハワイの話が出ましたけれども、上地先生に初年度から 3 年間やっていただいております。加えて、今年からはシンガポールでも海外研修を実施しました。ハワイが 18 名、シンガポールが 13 名。沖縄のモデルとなるハワイでツーリズムを学ぶ、合わせて、アジアの発展ぶりをじかに見て、そこでシンガポールの大学生との交流などさまざまな機関を訪問しながら学んでいく。そうしたことが、学生にとって次のステップにつながるというのは、私は大学に来てまだ 1 年半にしかなりませんけれども、去年ハワイに研修に行った学生が、もう既に改めてハワイ大学に留学しておりますし、60 名の学生のうち 10 名近くは海外で今学んでいると思います。そうして国際的な視野を広げて帰ってくる。そのいいところは、戻ってきて 1 年遅れたり、まあ、そのまま上がっていく子もいますけれども、年次を越えた交流が広がって、さらに後輩がまたそれを目指していくという機会にもつながっています。

今、教員、学生からいろいろなお話をしていただいたわけですけれども、改めて東さんから見て、大学の役割、沖縄の大学の役割、先ほどもちょっとお話があったんですけれども、地域のことだけではない、もっと広く視野を持つ必要があるということで、琉球大学の観光科学科に対する見方というのを改めて紹介いただきたいと思います。

東：先ほど時間をとって、私と観光科学科のかかわりみたいなことをお話しさせていただきましたけれども、これからは、皆さんのすばらしい意見を聞いて、私が準備してきていたものを少し構成を変えたいと思います。大島先生の世界にチャレンジするということから始まり、世界を見ることが非常に重要だという話がありました。私からはもう少し広げて、大学生だからできること、また大学だからできるこ

とというのは、もちろん、沖縄の観光振興はとても重要だと思います。とても重要ですけれども、フィールドを沖縄に限ってしまうと、結果、いわゆる沖縄で 1 番とか、せいぜい日本で 1 番ぐらいにしかなれないと思うんです。何が言いたいかというと、コーネルがいいとか日本がどうのということではないし、これから言うことは、別に私はどちらがいいということではないんですが、私がいたころのコーネル大学には、ツーリズムという科目は 1 つしかありませんでした。先生も 1 人の教授しかいなかったんですけれども、今はツーリズムはないそうです。海外では、ツーリズムという部分、いわゆる地域観光は、観光開発とホテルマネジメント、またはトラベルインダストリー・マネジメントとに観光産業経営は分けて考えています。分けた方がいいのか、一緒に勉強した方がいいのか。リベラルアーツ的に一緒にやった方がいいということは私も思います。

何が言いたいかというと、その後のキャリアにすごく関わってくると思うんです。私がいたころのツーリズムを勉強したいという人は、行政職から来ている人か、行政で地域開発や地域のマネジメントに行きたい人たちでした。ホテルマネジメント、トラベルインダストリー・マネジメントを学びたい人は民間企業に行きたい人たち。後者の民間企業に行きたい人たちは、どこでもいいんです。ホテルマネジメントを勉強して、世界の成長している場所を探して、そこに行ってホテルをつくる、またはホテル投資をする、そういった仕事がしたい人たちなんです。ですから、先ほど言いましたように、フィールドを沖縄に置くのではなくて、もうかるところ、成長することであれば、どこへでも行って、そこを住処にするつもりでみんな散らばっていってるんです。

今はどうなっているかというと、私が卒業してもう 25 年ぐらい経っていますけれども、クラスメイトたちが香港やシンガポール、または日本にたくさんいます。アメリカ人やヨーロッパ人のクラスメイトです。そのころ沖縄なんて言っても誰も見向きもしなかったんですけれども、実際、沖縄の某リゾートを最初に買収に来たファンドの人は、あのときハゲタカと言われていましたけれども、私のクラスメイトでした。それからじきに全日空が全てのホテルを売却いたしましたけれども、そのときの売却した担当者も私の後輩でした。そういう形で、いわゆるもうかるところと言ったらおかしいですけれども、成長するところであればどこだって行くという考え方を、ぜひ学生時代には持っていただきたいと思います。

琉球大学の観光科学科に集まってくる――先ほど見ましたら北海道や中国あたりからも来ていますね。その人たちが北海道に帰って、または地元に帰らなくてもいいですけれども、世界中で活躍して成功するから名前がどんどん上がって、ネットワークができていくと思うんです。沖縄の中で活躍することもとても重要ですけれども、それだけではなくて、外を見るだけではなくて、外に拠点を置いて自分を試すことが重要なことではないかと私は思いました。

もう 1 つ、ですから、そのためには先を考えたビジネスモデルというか、そういうことを考えていかなければならないと思うんです。10 年前というか、2000 年に入ってから、下地先生が行政職にいるときによく話をしましたけれども、私はもうそのころに、国内は閑散期対策だけでいいですよという話をしました。それよりもインバウンドをやりましょうと。そのころはインバウンドという言葉さえ一般的でなく、沖縄に 10 万人とか 15 万人ぐらいしか来てないような状況のときに、いわゆる外国人誘致、インバウンドをやりましょうということを言って、聞いてくれたのは下地先生のところの志ある何名かの人たちだけでした。今はこういう形で、当然の流れですけれども、インバウンド、外国人観光客が流れてきている。

今、私が皆さんに言いたいのは、第三国観光をやりましょうということです。第三国観光という言葉、聞いたこともない、耳慣れない人もいらっしゃるかもしれませんけれども、これは国の戦略の中にもあります。第三国観光をやる企業をどんどん産み出そうと。第三国観光というのは、行き先もお客様も日

本人ではありません。我々は、小さい会社ですけれども、今年シンガポールに拠点をつくりました。何をしようとしているかというと、レンタカーを今、沖縄と北海道でやっていますけれども、ニュージーランドの南島で来年、開業したいと思っています。来年は未年ですから、それに合わせてニュージーランドでということではなくて、沖縄、北海道の次に、アジア・太平洋の中で一番自然が美しくてドライブをして楽しいのはニュージーランド南島だと私は信じています。治安もいいです。そういうところを質のいい車で、かつ日本のレンタカー会社のサービスオペレーション、サービスのいいところで借りていただく。ただ、これは日本人はあまり当てにしていません。今、我々が持っている香港のお客様、台湾のお客様、そしてタイ、シンガポール、シドニー、オーストラリアのお客様を対象にしたレンタカーをニュージーランドの南島で展開しようとしています。成功するかどうかは、乞うご期待なんですけれども、行き先も顧客層も、日本人または沖縄の人を相手にしないモデルを考えていくことが非常に重要だと思います。星野リゾートが今、バリ島にホテルをつくっていますけれども、彼らも日本人を実際にはあまり当てにしていません。

80 年代、いわゆる JAL も全日空も一生懸命、海外のホテルを買収したり、つくったりしました。上地先生がおられるころもですね。上地先生がおられるのであまり言えませんけれども、あのころのビジネスモデルは、海外にホテルをつくりますけれども、日本人を相手にしようとしていたわけです。ですから、いわゆる下火になって、結局全部買収される。でも、国際ブランドやヒルトンやハイアットはアメリカの会社ですけれども、アメリカ人を相手にしようなんて思ってないですよね。ですから、そういう産業が日本からもどんどん出ていかなければならない。私は出るとしたら沖縄発で出てくるのではないかと思っています。

沖縄は人口 140 万人ぐらいで、資源もありません。ですから、世界中に、今回、ハワイ知事も沖縄県系人がなりましたけれども、南米北米にもたくさんの人がいて、あらゆる分野で活躍しています。それは沖縄県内に確固たる資源がなかったからだと思うんです。ですから、観光分野でもおそらく、この観光科学科が起爆剤となって、日本人、沖縄の人を全く相手にしないような大型のホテルや観光ビジネスがどこかで花咲くことを非常に期待したいと思います。以上です。

下地：ありがとうございました。既に琉球大学に期待するところというところまで踏み込んで結論めいたことが出てきておりますけれども、おっしゃるように、もっと視野を広く持つというのは言うまでもないことですし、今、東さんからお話があったように、コーネルのネットワークを見ていると、正直言って、うらやましいなと思います。今年の夏にコーネル大学の同窓会の講演会といいますか、シンポジウムに少し参加させていただいたんですけれども、こうしたネットワークの強さというのは、本音ですぐに連絡できて、すぐに聞ける、これというのは非常に強いなと。私も県庁にいるときから、こういう世界の動きについては、何かあると、東さんなり、上地先生がまだホテルにまだいらっしゃるときには彼を経由して情報を聞いていましたけれども、まさにこれからの琉球大学の将来のネットワークという意味では、こうしたことを目指していくというのは本当に迫ってきている話かなと思いました。

そういう意味で、安田さんは今、企業で働いているわけですけれども、これから世界にはばたく機会もあると思いますし、高江洲さんを含めて、お 2 人から、これからの琉球大学の観光科学科に求めることをぜひお聞かせいただきたいと思います。よろしくお願いします。

安田：では、観光科学科の学生に向けたというところに少し視点が行くかもしれませんが、私は 1 期生の卒業生ですので先輩はいなくて、同期生または後輩を見渡したところ、優秀な学生もしくは卒業生が多いという印象を受けています。各方面で活躍していますし、卒業した後に、各方面に卒業生が飛び散っているのが 1 つの特性なのかなと。これは理系に限らず、文系、そして行政もそうですし、実際の現場、

ホテル産業やウエディング産業、またツアー会社などに各卒業生がいるのは、1つ観光科学科の特色だと思います。

観光を4年間、すごく身近に、今でもそうですが、考えていたこととして、観光というのは、観光という物が何か1つあるのではなくて、いろいろな1つ1つのことをつなげる役割を持つものだと思います。例えば、いい「やちむん」をつくったとしても、それを見る人、評価する人、もしくは買いたいと思う人がいなければ、それはいい物ではないのかもしれない。物があって、その周りにどんどんつながりができてはじめて評価があったり価値が生まれるんだと思います。

観光科学科の学生ないしは卒業生ひとりひとりはすごく価値のある人材だと思います。その人材がより高度な人材になっていく1つのツールであるネットワーク、これは観光に通じるところがあると思います。そのつながりをどんどんもっと強化していきたいと思っています。その取り組みの一環として、同窓会を立ち上げ、運営しています。決して今、スムーズか、充実している活動ができているかと言われると少し疑問符がつくところですけれども、引き続き尽力していきたいと思います。

なので、今学生に対してということであれば、現在、身の回りにいる同期生ないしは後輩、先輩とのつながりというのを、今ここでつくってほしいと思います。卒業してからそれをつくろうとすると2倍、3倍の力、もしくはもっとエネルギーが必要になると思いますので、今のうちに横のつながり、もしくは身の回りにある縦のつながりをつくった上で、卒業後、さらにそのネットワークを広げていくという努力をしていきたいと思いますし、してほしいと思います。人脈はあるものではなくてつくるもの、そして維持する努力をするものだと思っていますので、学科の特色としてそういったことを強化していければと思います。また、期待ではなくて、私もそういったことに役立てればと思っているという決意を一言添えさせていただきたいと思います。以上です。

下地：ありがとうございました。今日は、会場に現役の学生も来ておりますので、今のメッセージはしっかり受けとめていただいたと思います。

それでは高江洲さん、よろしくお願いいたします。

高江洲：私からは、観光科学科に対して1つだけお願いがあります。先ほど申し上げましたように2年次の夏にハワイでの研修プログラムに参加させていただきました。このハワイ大学で学んだときもそうでしたが、観光を考える上で、経営、経済などの数字系の知識が絶対必要だとひしひしと感じました。私自身数字にとても弱いので、ハワイでの授業は「何これ？」というふうに聞いていたんですが、それでも必要な知識だと感じました。

観光産業科学部には、観光科学科と産業経営学科がありますので、それが独立した形ではなく、それぞれが一体となって双方の授業を取りやすいような仕組みをつくっていただけたらとてもうれしいです。その枠を双方に設けていただくことによって、観光科学科生と産業経営学科生の交流や意見交換が盛んに行われれば、もっといい学部になるのではないかと思います。よろしくお願いいたします。

下地：ありがとうございました。今、高江洲さんから学科に対する要望がありました。ここは答えるとすれば大島先生、上地先生、どちらかお1人代表でお答えいただいてよろしいでしょうか。

上地：はい。高江洲さんからハワイ大学の研修の話が出まして、思ったのは今回18人のメンバー構成に関して、学科どうしの交流が今までやや不足だと思いまして、それぞれの先生の下に、実は両学科の生徒を均等に取り入れました。感じたことは、観光産業科学部ですから、産業経営の学生にとっては冠は観光です。経営については、観光科学科の学生は経営に弱い。産業経営学科の学生は観光の力がやや弱いかなというふうに毎日指導しながら感じました。今は話があったように、それぞれの長所短所を融合して、もう少しバランスよく教育できないかなと。そういう意味ではハワイの授業は、限られたメンバー

ですが、大変、相手側のことを勉強しようという努力がとても見えてきました。
実は直接この件とは関係ありませんが、3 年前から観光専攻の学生の他に、他学部に対して「観光への扉」という授業が開講しました。大変人気がありまして、私も 1 科目持たせていただいて、86 名でしたかね。授業を終えたあと、アンケートをとらせていただいて、大変参考になる意見がたくさんございました。2、3 紹介したいなと思います。例えば、物質地球科学専攻の学生から、観光の基礎から学ぶことができてとてもうれしく思います。観光は、沖縄の産業を学ぶ上で欠かすことのできないとても重要な産業だと考えます。沖縄の唯一の国立大学である琉球大学は、このような授業をさらに増やしてよいのではないかと考えます。それから、地域農業工学科専攻の学生からは、今日の講義で観光は幅広いと感じました。これから、沖縄のことは私たち沖縄県人が考えて、観光客が楽しめる居心地のよい場所にしていく必要があると感じました。最後にもう 1 つ、英語文化専攻の学生です。自分自身は観光客の人々に冬の沖縄を楽しんでもらう方法を今まで一度も考えたことがなかったことを反省します。これからは季節を問わず魅力的な島になるように考えていきたい。全部で 86 通ありましたが、本当にいろいろなことを考えさせられました。沖縄の観光というのは、観光を専攻する学生だけじゃなくて、琉球大学の全ての学生、観光に対する興味ある学生に我々教員は授業を提供したり、あるいは考え方を伝えたりという意識がもう少し必要かなと。大学生が卒業して一県民としてそれぞれ現場で観光客を温かく迎えるということは、沖縄の観光に一番重要な魅力、資源かなというふうに、いろんな意味でアンケートを読みながら考えさせられました。

下地：ありがとうございました。予定の時間を少し超えてしまいました。それでは、上原会長、先ほど基調講演をしていただきましたけれども、パネリストのお話を受けて少しコメントをいただければと思います。

上原良幸氏（一般財団法人沖縄観光コンベンションビューロー会長）：観光科学科を初め観光学科と思ってましたので、何で観光科学というのか。聞いてみたかったんですが、テーマがそれではなかったので遠慮したんですけれども、科学科としたのはなぜなんですか。

下地：ありがとうございます。ここは初代の大島先生からお答えいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

大島：なぜ観光科学科なのかという、とても根本的な質問をいただいたんですが、観光学科という名前は全国にたくさんあるんですね。50 以上あります。観光の前にいろいろ名前がついて何々観光科というところもあるんですけども、観光を科学するということで、基礎学問であると。さまざまな学際性という点もありますが、既存の社会学あるいは教育学、農学とか、基礎学問の科学の視点から観光にアプローチして分析していくという非常に少しレベルを上げたというか、ただ観光を勉強するだけじゃないんですよと、観光を既存のさまざまな基礎学問のアプローチから切り込んでいくというのが初代の学科長の教えで、大城常夫先生はその点を大事していこうということでした。名称はいろいろな名前が挙がったそうなんですが、1 点、観光を科学するという切り口で、教員の多様な研究分野、それを教育の場面でいろいろな形で実践していこうということで、観光科学科というふうに名付けたと私は聞いております。ただ、学生はなぜか観光科と短くして呼んでしまうので、常々そのたびに、観光科学科ときちんと名称を言いなさいというふうに言っております。観光科学という学科は実は全国的にありません。大学院の名前で観光科学という形で、専攻を名付けているところはございますが、学科レベルで観光科学とついているところはないようです。

下地：ありがとうございました。一昨年ぐらいの統計で観光学部、観光という冠がついた大学が全国で 42 というふうに私は覚えておりますが、そうした中で、観光科学というスタンスで取り組んでいるのは琉

球大学のみです。実際に教員の皆さんも文系だけでなくて理系の先生も一緒に取り組んでおりますので、そうした部分で、観光科学と同時に、先ほど高江洲さんからお話があったビジネスの部分も含めた学科として、もう少し幅広い取り組みが必要なのかなというふうに私も聞いていて思いました。

時間がなくなってまいりました。会場の皆さんからも、もう少しお話を聞きたいところですが、最後にパネリストの皆さんから一言ずつご挨拶いただいて、このシンポジウムを閉めたいと思います。それでは、東会長からよろしくお願いいたします。

東：一言ということなんですけど、先ほどもありましたように、サイエンスするということ、経営ということから考えると、私の要望としては、具体的に言うと会計学の部分やリアルエステート・マネジメント――不動産投資などが沖縄の中でもかなり増えてきています。それから今、国レベルでも国際間の規制が違うために日本の観光や産業が競争力を欠いているという状況があって、そうしたイコール・フッティングの問題ですね、いわゆる諸外国と日本のいろいろなシステム、規制といったものが違うということです。また、空港の公租公課とかですね。そういったことが卒論のテーマや研究テーマになれば、沖縄の社会に非常に貢献できるんじゃないか、または企業経営に貢献できるんじゃないかなと思います。いろいろ、縷々申し上げてきましたけど、今、荒川先生、学科長のアドバイスをいただきながら、沖縄ツーリストも来年からきちんと寄付講座をさせていただいて、言っているだけではなくて、自分たちも仲間として貢献していきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。ありがとうございました。

下地：ありがとうございました。寄付講座よろしくお願いします。ありがとうございます。では、上地先生お願いします。

上地：本年、10 周年を迎えまして、卒業生もおよそ 300 人を超えるぐらいのメンバーが各分野で今、活躍しています。当然、皆さんの力を束ねて、観友会のみならず、学科の先生方も、どうぞぜひ卒業生たちの社会における悩みや問題等をある程度サポートいただきたいと思います。OB の力というのは他の大学も、皆さんご存じのように非常に絶大でして、300 人の OB がきちんとやっていれば、後輩もそれを目指して頑張るわけですので、ぜひ、それを含めて、後輩というか、先輩後輩の絆をもっと強めていかなければならないと思っています。本日は長い間、ありがとうございました。

下地：ありがとうございました。では、大島先生、お願いします。

大島：今日のシンポジウムを受けて私が思ったのは、学生のニーズをきちんと把握するということ、そして、沖縄の地域社会が求めているニーズ、観光立県沖縄としてのニーズにしっかり貢献できる学生を育てることです。それに対して、教員も努力するということを改めて感じました。ですから、観光産業科学部として、そして観光科学科の教員として、自分の研究、そしてそれを活かした形で教育にしっかりと責任を持って携わり、そしてしっかりと貢献できる卒業生を地域に送り出すということが私たちの使命だと感じました。今日はありがとうございました。

下地：ありがとうございました。それでは、安田さん、お願いいたします。

安田：設立して 10 周年を迎えて、実のところ私が、例えば営業活動をしていて、取引先の社長さんとお話をする中で、「君は大学はどこなんだ」という話をしたときに、琉大だと、「学科は？経営なのか、経済なのか」と聞かれたときに、観光科学科ですと言ったらクエスチョンマークが付くんですね。10 年経った今でも、まだまだ観光業界に従事している人でなければ観光科学科の存在は認知されていないと感じる場面が多いです。これから後、私も含めて卒業生、今の学生全員が頑張ることによって、もちろん、教員や業界の皆さんからアドバイスや指導をいただきながら頑張っていくことによって、観光科学科というものの認知が高まり、ブランドになり、「どこね？」と言われていたのが、「あの」と言われるような学科になっていくよう、私も頑張っていきたいと思います。今日はありがとうございました。

下地：ありがとうございました。それでは、高江洲さん、お願いします。

高江洲：私たち観光科学科生がこのようなすばらしい環境で学べるのも、ひとえに先生方をはじめ、地域の皆様、観光業界の皆様のご協力があってのことだと、本当に心から感謝しております。私も現在、観光親善使節として大変貴重な経験をさせていただいておりますが、そのきっかけとなる考えの土台というのは観光科学科で培われたものだと確信しています。来年は私も就職活動がありますので、この学科で学んだことを活かして、ぜひ頑張っていきたいと思います。本日はありがとうございました。

下地：ありがとうございました。会場の皆さん、長い時間、ありがとうございました。今、それぞれのパネリストからお話がありましたように、琉球大学観光科学科、まだまだやるべきことがいっぱいありますし、それを学科だけではなくて、地域の皆さん、さらには国際的なネットワークも使いながら、さらに広めていくことが必要ではないかと強く感じました。そういう意味では、学生を教育する場ではありますけれども、先ほど申し上げたように、琉大が社会とつながる、そういう中では、社会人の皆さんがもう一度大学と接点を持つ。それは教員とだけではなくて、学生との接点を持つことでもありますので、ぜひまた社会の皆さんも、観光科学科だけではなくて琉球大学、さらには琉球だけではなくて県内の大学にもぜひ興味を持っていただいて、学生、教員と接点を持つ機会になれば非常にいいのではないかと思っています。

それでは、これをもちまして本日のシンポジウムを終了させていただきます。会場の皆さん、パネリストの皆さんへ大きな拍手をお願いします。どうもありがとうございました。